京都美術工芸大学

（京都市東山区）

仏像を修理する学生たち＝東山区の京都美術工芸大

本物に触れ 磨く感性

五感で感じる 文化財の本質

まなビバ！ 大学編

作業台に解体された仏像が並ぶ。作務衣姿の学生が真剣な表情で、脱脂綿で部材に残る古い接着剤を取り除いていく。

「彩色がはがれないように」

小林泰弘教授(58)が注意を促す。東寺の四天王立像などの修理を手がけてきた専門家だ。

1～4年まで36人が学ぶ文化財情報コース。週1回、3コマ通しの実習で、預かった仏像を修理している。

仏像は、南丹市にまつられていた市指定文化財の三十三観音像だ。江戸時代の作だが、像が傾いて傷みが激しい。そこで地元地区と大学、市が連携し、3年前に実習が始まった。

毎年、大学に運ぶのは数体。像の文化財としての価値を調査したうえで、どのような方法と工程で修理するか決める。修理は1年がかりになるという。

「学生が本物の仏像に手を触れるのはもちろん、報告書まで書くのは全国でも珍しい」と村上隆副学長(64)。京都国立博物館の学芸部長も務めたエキスパートだ。

本物にこだわるのは理由がある。「自らの五感で文化財に触れることで、それを作り、伝えてきた人々の思いや、ものづくりの本質を感じてもらいたい。本物を前にすると、学生の立ち居振る舞いが変わる」

3年の井下紗恵さん(21)は「大事にまつられてきた仏像に私が触れていいのかと、おそれおおい気持ち」と話す。

学生は、正倉院（奈良市）の宝物の復元模造品をつくるプロジェクトにも参加。さらに、多くの国宝や重要文化財に接することができる大学かいわいの環境を生かし、三十三間堂や京都国立博物館などを回ってリポートをまとめている。3年の最田真末さん(20)は「技法を学ぶほど昔の人の技のすごさを感じるようになった」。

卒業後の進路は美術印刷会社や漆工房、社寺建築など。博物館の学芸員や、文化財を活用する観光業への就職を希望する学生も多いという。

「本物に触れて磨いた感性はどんな職業に就いても生きる。文化財の活用を考えるときも、やっていいこととダメなことは区別できるはずです」と村上副学長。

4月に学長に就いた冷泉為人さん(73)は、藤原俊成・定家を祖先にもつ冷泉家の25代当主だ。多数の古典籍を守り伝える冷泉さんはこう話す。「インターネットで色々な答えが出てくる時代だが、人生に答えはないからこそ歴史や文化を学んで考える。そして社会とぶつかって、また考えるという繰り返しが人生を豊かにすると伝えたい」

（久保智祥）

学内ギャラリーに展示された屏風の前で話す冷泉為人学長

次回（19日）は神戸学院大学を紹介します。

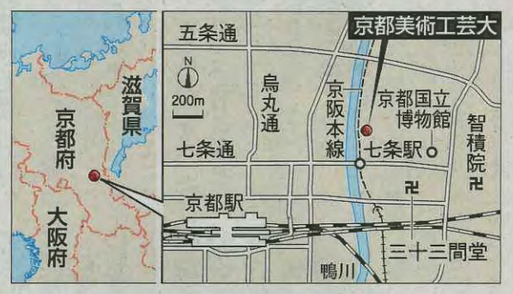
建築と工芸 伝統学ぶ

建築と伝統工芸（来春に美術工芸に改称）の2学科があり、約400人がデザインや建築、工芸、文化財について実践的に学ぶ。

最短で3年生のうちに2級建築士や木造建築士の資格を取得できる。グループの専門学校「京都建築大学校」と連携。建築の構造やデザインを学ぶ大学の講義に加え、受験資格を得るのに必要な専門的な科目を2年間で受講する。

学校法人二本松学院が2012年、「日本の伝統美の新しい価値を創造し、世界へ発信できる人材育成」を理念に、南丹市に開学。希望者には毎年、伝統的な工芸が息づくイタリアでの研修を実施している。

今年4月には東山区の鴨川沿いに新キャンパスを開き、教育拠点を全面移転した。京都市とは、観光や伝統産業の分野で連携協定を締結。学内に一般入場もできるギャラリーを設け、「洛中洛外図屏風」の複製などを展示している。



公募展受賞重ね 社会へ一歩

無数の花が精緻に敷きつめられた華やかで上品な器。制作したのは工芸コースで陶芸を学ぶ吉岡遙さん(22)だ。

京焼・清水焼の京都陶磁器協会が主催する「わん・碗・ONE」展の公募展で、最優秀賞を2回、優秀賞を1回受賞。卒業後は幻の技法と言われる京薩摩をよみがえらせた工房「空女」（伏見区）に入る。「上絵付けは使う色でまったく別の作品になるのが魅力。見た人がハッと目を留め、じっくり見入るような作品を作りたい」

指導する浅見武教授(55)は「成形して焼くまでの基礎をしっかり教えつつ、公募展などに出品することで社会へどう踏み出すか意識づけたい」と話す。

企業連携ゼミで3次元表現

ガラス張りの「デジタルラボ」にはパソコンのモニターが2台1組で並ぶ。総合デザインコースの学生が取り組むのは、ゲームの背景となる3次元のCG（コンピューター・グラフィック）映像の制作だ。

ゲーム受託開発専門企業トーセ（下京区）と連携した通称「トーセゼミ」は、同社のデザイナーから3次元表現を学ぶ。中井川正道教授(59)は「クリエーターとして活躍できる最先端の武器を学生に持たせたい」と話す。

3年の福田俊宏さん(21)は「細かいところへのプロのこだわりや観察眼がリアルな表現につながることが体験を通してわかりました」と話す。